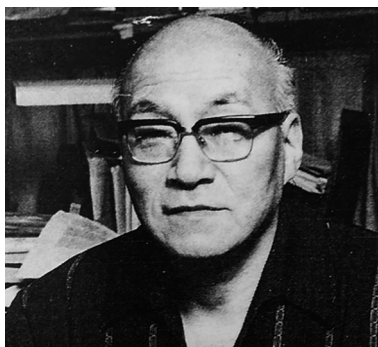


「宗田文庫」と出会って

光 平 有 希

私が「宗田文庫」の史料を初めて手に取ったのは、今から七年前の春。総研大入学の前年にあたる二〇一二年のことであった。その当時、他大学の博士課程に在籍していた私は、特別共同利用研究員として初めて日文研を訪れた。訪問初日に図書館案内をしてくださった指導教員のクレインス先生から、「医学史のことで何かつまづきを感じたら、宗田文庫と野間文庫をま



(図1) 宗田一 氏

ず覗いてみてください。特に日本医学史関連は宗田文庫から学ぶことが多いと思います。」と言われたことを、今でも鮮明に覚えている。その頃、機械論的身体観を用いた近世イギリスの音楽療法に関心を持っていた私は、西洋古典医学書が多く収蔵されている「野間文庫」には度々お世話になっていた。しかし、その時「宗田文庫」という名前は初耳。そこにはどのような史料が揃っているのか、非常に興味をそそられた。そして、「宗田文庫」所蔵史料を目の当たりにした時、「宗田文庫」「野間文庫」という東西の医学・医療に関する史料がこんなにも豊富に揃っているところが国内にあ

るといふ事実、私は心底驚いた。

その後、総研大の院生になり、近世・近代日本音楽療法の研究を開始した私にとって、「宗田文庫」は駆け込み寺のような存在になっていった。疑問が芽生えたとすぐ駆け込めるように、学生生活の大半を過ごした場所は「宗田文庫」と、その史料を見るための貴重書閲覧室がある図書館の三階だった。だから、決して大げさではなく、私の学生生活の想い出は、友人と語りあった時間も、思うように論文の筆が進まずウンウン唸った時間も、ほぼ図書館の三階にある。

とはいえ、「宗田文庫」を利用するようになった当初、これらの貴重な史料群は、私にとって呼び名こそ「そうだぶんこ」だったものの、「宗田一（そうだはじめ）」という医学史・薬学史研究者が生涯に亘り懸命に収集した、その遺史料群としての「宗田文庫」だという認識にはまだ欠けていた。しかし数ヶ月経ち、ふと院生室の本棚に置かれたファイルを眺めていた時、自らペンで書いた「近世・近代日本医療史」という区分には、作者「宗田一」の著わした論文や各種記事が数多くバインディングされていることに気づいた。そして、「もしや」と思って、常々机に置いていた『図説 日本医療文化史』を取り上げると、そこにもまた宗田氏の名前が記されていた。——それが、遅ればせながら、私にとって文庫のタイトルとしての「そうだ」ではなく、医学史・薬学史研究者「宗田一」との改めての出会いとなった。

ここで、宗田一氏の略歴に触れておきたい。宗田氏は一九二一（大正一〇）年三月に新潟県に生まれた。金沢医科大学薬学専門部を卒業後、製薬会社に入社。会社勤務の傍ら、大阪大学などで教鞭を執りつつ、漢方や蘭学の交渉史など、民俗及び文化史的な視点から医学・医療や薬の史料収集及び研究に尽力した。そして、一九九六（平成八）年七月に七五歳で死去するま

で、日本医史学会や洋学史学会でも活躍し、日文研にも共同研究員として屢々研究会に出席されていたという。また、著書・論文には『図説 日本医療文化史』『渡来薬の文化誌』『図録 日本医事文化史料集成』（共編）などがあり、数えると枚挙に暇がない。

さて、「駆け込み 宗田文庫」のお陰もあってか、私もなんとか学位を取れ、プロジェクト研究員になった二〇一六年の春。クレインス先生との会話の中で驚くべきことを耳にした。なんと、「宗田文庫」には、これまで史料登録されたものの他に未整理の史料が多数あり、それらは図書館のある一室に保管されているというのである。私は、思わず耳を疑った。というのも、現在、宗田文庫としてデータベースに掲載されている史料は、錦絵や医療関連絵巻物など図版史料だけでも一一〇四点ある。それに加え、千冊単位の医学・薬学関連の図書（洋貴重書や和装本も含む）が既に「宗田文庫」として登録されているのだ。一人の研究者が生涯をかけて収集した史料といっても限度がある。そんなに集められるものなのか――。しかし同時に、もし本当に未整理の史料があるならば、そこにはどのようなものがあるのか是非一度見てみたい。そのような強い思いがふつふつと湧き上がってきた。そして、その思いに押し切られる形で、書き物をしていたクレインス先生は作業の手を一旦止め、お忙しいなか一緒に図書館まで足を運んでくださった。

未整理の「宗田文庫」史料が保管されているのは、図書館の三階にある映像文化資料室。部屋に着きドアを開けた瞬間、目に飛び込んで来たのは、積み上げられたおよそ二百箱の段ボール群だった。その時の衝撃は今でも忘れられない。私は思わず、「少しだけ中を見ていいですか?」とお願いし、段ボール箱の一つ・二つ開けさせてもらった。そこには、宗田氏直筆のノートや史料ケース、ファイル等がギッシリ詰まっており、これらの研究の積み重ねが、私が学生時代、



(図2) 段ボールに含まれる史料ケースの一部

多くの学びを得た宗田氏による論文や著書に繋がっていったのかと思うと、なんとも感慨深かった。その後は、プロジェクト業務である日本関係欧文図書の手誌を取る合間に、空き時間を見つけては段ボール箱の中身を覗きにいくという日々が続いた。

数ヶ月が過ぎた同年の十一月、平戸への出張を京都大学・名誉教授の松田清先生と一緒する機会があった。松田先生は、生前親交のあった宗田氏の逝去後、遺史料群を日文研所蔵とすることに尽力され、膨大な数の史料確認や日文研受入のための史料箱詰め、そして既登録史料の目録作成に至るまで一手に担った人物である。松田先生と「宗田文庫」との強い繋がりについては、以前よりクレインズ先生から耳にしており、

私は、平戸出張が決まった時から、どこかのタイミングで松田先生に「宗田文庫」受入までのいきさつや、未整理史料の全容をうかがおうと、内心ワクワクしていた。

そしてやってきた大チャンスが、帰路の新幹線であった。平戸での史料調査・収集の一仕事を終え、新幹線の隣席で、ビールを片手に竹輪を美味しそうに頬張る松田先生に、私は唐突にも「宗田文庫」について多くの質問を投げかけた。質問一つ一つに先生は笑顔で丁寧な返答を下さり、私はその言葉に夢中で耳を傾けた。その中で、特に印象に残っているのは、「宗田文庫」は広い意味での薬を中心とした一五世紀末から現代まで五百年間に亘る日本医療文化史料

の一大宝庫である、と先生が力説されたことである。さらに、宗田文庫は未整理のものも含め、一次史料を中心として、研究ノート、研究書、雑誌が同心円状に見事に構成されており、しかも一冊一冊、一点一点に宗田氏の目が入っていること、そして、実証的な厳しい学風を自らに課した学者の蔵書として、後世に伝えるに値するということである。その話を聞き、私は必ずいつかあの段ボールの中の史料を整理し、多くの研究者が活用できる状態にしたいと固く決意したことを覚えている。

そして迎えた二〇一八年春。機関研究員となった私は、業務日以外の曜日を中心にクレインス先生や松田先生の指導も仰ぎつつ、また、資料課の皆さんやRAの総研大院生二名の助力も得ながら、「宗田文庫」の整理を開始した。そこでまず行ったのは、重複史料の分別と、全段ボール箱に含まれる史料の現状を崩さないよう配慮しつつ、ナンバリングした段ボール箱ごとに大枠の内容物データファイルを作成することだった。

これまで未開封だった段ボール箱をあけていくと、そこにはノート、ファイル、手帳、手書き原稿、パンフレット、ポスター、写真などの他に、モノ史料も多数出てき



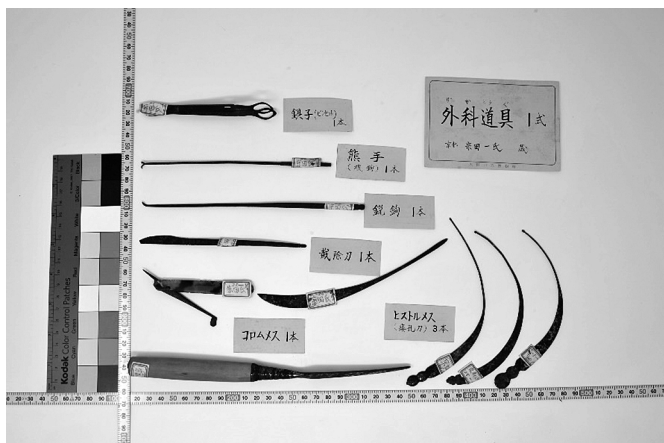
(図3) 史料整理の様子

た。モノ史料の中には、儀礼や祭事で使われる面や護符、お守りに加え、多数の薬袋や「旅行用意懷宝急用薬」「薬名扇」「薬局版本」「香道具」、さらには明治期に使用された外科道具なども含まれていた。その史料の価値の高さには目をみはるばかりである。

さらに時間をかけて一点一点の史料を見ていくと、ノート群の中には、戦時中、北部方面軍第二部隊（旭川）通信隊に徴兵されていた宗田氏の従軍手帳や、若き頃は絵描きになりたかったという宗田氏自らが描いた水彩画やスケッチの数々も出てきた。また、手帳には日々の想いが綴られ、ノートの断片には自身の集大成として人生の最期までに成し遂げたいと考えて作成された研究計画がギッシリ書き込まれている。このように史料と対峙していると、まるで史料を通して宗田氏本人と会話しているようである。会ったことはないものの、宗田氏の人柄にも触れたような気持ちになる。そして、そこから研究に対する熱い想いや向き合い方、さらには具体的な研究手法に至るまで、史料を通じた多くの御指導をいただいていることに気付く。



(図4) 旅行用意懷宝急用薬 [江戸時代]



(図5) 外科道具 [明治時代]

今後は、より詳細な内容確認を進め、資料課の方々のご協力をいただきながら未整理史料の目録作成及びデータベース掲載を模索していく予定である。今年度末(二月・三月)には、安井先生の御助力・御指導のもと、天理大学の学生さんたちにも手伝っていただきながら、大掛かりな簡易目録作成を行い、その過程で古川先生にも史料整理に関する貴重な御助言をいただいた。多岐に亘る「宗田文庫」の膨大な史料は、医学・医療分野のみならず、民俗学や宗教学、文化史、風俗史など様々な研究領域の専門家がいる日文研でこそ、研究深化の「生きた史料」になり得る大きな可能性を秘めている。段ボール箱の中に埋もれている史料が公開され、内外の研究者により様々な用途で活用される目を目標に、今後も作業に励んでいきたい。そして、この整理作業を行うにあたり御助力いただいている皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げたい。

(国際日本文化研究センター機関研究員)